

『路上』におけるサルとディーンの別れの意味と時代変化

はじめに

日本のことわざでも「かわいい子には旅をさせよ」や「旅は道連れ世は情け」など旅を題材にした表現が数多くあるが、アメリカ文学でも旅によって自己発見をする作品は多い。アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)によって全てのアメリカ文学は『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884)から始まったと言わしめたこの作品はまさに旅を題材とした作品の元祖である。そしてジャック・ケルアック(Jack Kerouac, 1922-69)の『路上』(*On the Road*, 1957)¹は第二次世界大戦後を舞台にした車による放浪の旅の文学であり、その過程で自己発見をしていく若者の姿を描いた作品である。

中心的な登場人物は語り手であり主人公のサル・パラダイス(Sal Paradise)とサルを旅へと導いていくディーン・モリアーティ(Dean Moriarty)である。サルは第二次世界大戦からの帰還後の心の空白、そして自らの離婚によって満たされない状態で初めてディーンと出会う。ディーンの登場はサルにとって何らかの意味を与えるものであり、人生に新たな局面をもたらす事になる。この事はサルの“ With the coming of Dean Moriarty began the part of my life you could call my life on the road. Before that I'd often dreamed of going West to see the country, always vaguely planning and never taking off ”(3)という言葉に表されており、ディーンの出現はサルにとって満たされない心の打開の契機になるものとなる。実際にサルはアメリカ各地をディーンと旅をすることにより、心の停滞状態から恋や享樂の日々など、活動性へと人生が変化していく。

ただし、このディーンとの活動の人生はずっと続いていくのかという、答えは否である。作品終盤のディーンとの別れの場面を引用してみる。今はフィアンセがいるサルが友人たちとコンサートに出かける時にディーンと出会う場面である。

‘ Good-by, Dean, ’I said. ‘ I sure wish I didn’t have to go to the concert. ’

‘ D’you think I can ride to Fortieth Street with you? ’ he whispered. ‘ Want to be with you as much as possible, m’boy, and besides it’s so durned cold in this here New Yawk. . .’ I whispered to Remi. No, he wouldn’t have it, he liked me but he didn’t like my idiot friends. I wasn’t going to start all over again ruining his planned evenings as I had done at Alfred’s in San Francisco in 1947 with Roland Major. (280)

自分の人生の意味を与えてくれたディーンよりも友人を重視するサルの姿が明らかだし、ここにはサルを強烈な個性で旅に導いた力強いディーンの姿は見られない。出来るだけ一緒にいたいし、寒いからという理由で寂しさを吐露する弱さを見せるディーンの姿が明らかである。時間の経過によって二人の関係は変わったのだ。サルは自分に会いたいという事は別にしてもなぜ会いに来たのかは分からなかったとさえ語り(281)、ディーンとはもう同じ立場ではない事を意識している。別れの結末である。

サルとディーンの別れに関連させた評を行っている批評家は多い。R. B. Gillは“ *On the Road* is filled with mainstream interests embraced with the spirit and excitement of youth. The actions and characters of the novel are justified by the enthusiasm with which they are encountered ”(89)として若さによる精神、興奮、熱狂という刹那性を作品の特徴とし、サルとディーンの関係の一時性に関連付けられるような意見を述べている。Gillは二人の終焉を予感している。そして Tim Cresswellは旅の地理的移動と精神について述べ、“ In *On the Road* there is a repeated pattern of excitement with the prospect of a new city, a period of exploration then dejection and sadness followed by continued travel ”(254)と旅についての精神的変化を述べている。そして旅を主な行動とするサル

とディーンの二人の精神の変化、結局の二人の別れという変化にも広げられるような意見を述べている。そして作品そのものではないが、ケルアック自身の作家としての名声と芸術的志向の乖離を述べた Ronna C. Johnson は “ Representing fame as an invasion of privacy and breach of the chosen austerity of the artist’s life, the novel portrays the media’s attention to the writer’s person in place of his work as an act designed to coerce into conformity subjects who are designated dissident ”(30)としており、作品成立の相反する背景を述べている。サルとディーンの違いと別れにも関連付けてもいいだろう。このように一時性や変化や矛盾の意見を述べる批評家の意見を参考にしながら、本稿では上に示したサルとディーンの心の変化と別れの意味を探ってみたいと思う。

1. サルの安定性

『路上』のストーリーはサルとディーンの旅であり、二人に注目してみるのは当然の事である。作家であるサルが路上放浪の生活を続けていくのは奇妙だし、自らの衝動と欲望を人生の軸と考えているディーンとは合うはずがない。しかし、彼らは何年間かを一緒に過ごし、それぞれの生活に戻っていく。サルは作品冒頭で “ I first met Dean not long after my wife and I split up ”(3)という満たされない心の状態でのディーンとの出会いを説明しており、ディーンとの旅は心の空白を埋める行動の一環であると思われる。

サルにとってのディーンとの旅の意味を説明する Douglas Malcolm は “ The behavioral aspect of jazz performance is one of the devices used by Kerouac to help shape the novel’s narrative. *On the Road* involves the quest of Sal Paradise for transcendent signification in his life, what one critic calls the “Dionysian ideal ” ”(102)と説明し、ジャズの刹那性、即興性に関連付けてサルの行動を人生における高次元への動力と意味づけをしている²。刹

那性や即興性、飛翔性というのは安定とは反対の意味と考えられる。たしかに放浪の生活は安定とは反対だし、その意味では間違いではない。

しかし、サルとディーンはそもそも異なった存在である。サルには安定性という要素が常にある。ここではサルの安定性を説明する事とするが、まさにディーンとの放浪生活を始めるきっかけにおいて、サルの安定性は暗示されている。ディーンとの出会いの場面を引用してみる。

Yes, and it wasn't only because I was a writer and needed new experiences that I wanted to know Dean more, and because my life hanging around the campus had reached the completion of its cycle and was stultified, but because, somehow, in spite of our difference in character, he reminded me of some long-lost brother; the sight of his suffering bony face with the long sideburns and his straining muscular sweating neck made me remember my boyhood in those dye-dumps and swim-holes and riversides of Paterson and the Passaic. . . . (9)

すでにサルは作家という職業を持っているし、そしてディーンとの性格の違いを認めつつ、ずっと前に亡くなった兄を思い出させるという家族の概念をディーンとの出会いに見出している。また過去の思い出、少年時代の思い出がディーンとの出会いにより蘇るというのは、自分が子供だった頃の家族の思い出、家族からの保護という安定性に近い意味をディーンからくみ取ったとも考えられる。ディーンとの出会いそのものが、サルにとっては安定性を印象付けるものだったのである。

一緒に放浪生活をするサルとディーンは心を通じ合わせるようになるが、サルとディーンは本質的に異なっている。ディーンの動きと衝動に付き合っているサルであるが、サルには常に帰る場所、叔

母の家があるのであり生活すべてを失う事はない。そして作家としての職業も持っている。安定性が常にサルには用意されている。ディーンが車を盗むのはただ走る喜びからだけであり、その犯罪性にはすねたところがない、とさえディーンを持ち上げるサルであり(9)、自分のニューヨークの友人たちを“ all my New York friends were in the negative, nightmare position of putting down society and giving their tired bookish or political or psychoanalytical reasons ”(9-10)と型にはまっている状態を非難しているサルそのものが、実はニューヨークの友人たちと同じカテゴリーからは抜け出していない。ディーンには知性があり、自分の友人たちの知性は退屈な知性の臭みとするサルそのものが、作家という“ bookish ”であり、“ political ”であり、“ psychoanalytical ”な要素を持つ職業に身を置いている。サルとディーンの出会いの本質、根本が異なっており、サルのディーンへの評価が、自分では気づいていないかもしれないが、矛盾を示しているというのが分かるのではないだろうか。

アメリカ中を移動しながらも帰る場所のあるサルである。この事は旅をする過程で金銭的に困った時にも頼れる場所があるという事にも明らかである。短期の職業に就いて金を稼いでは旅の費用に充てるサルであり、時には空腹に耐えなければならないサルであるが、いざとなれば叔母に助けを求められる。メキシコという外国にまで足をのびしたサル一行であるが、このような記述が第1部にある。

We started for Sabinal; the truck broke down, and simultaneously it started to rain wildly. We sat in the old truck, cursing. Ponzio got out and toiled in the rain. He was a good old guy after all. We promised each other one more big bat. Off we went to a rickety bar in Sabinal Mex town and spent an hour sopping up the brew. I was through with my chores in the cottonfield. I could feel the pull of my own life calling me back. I shot my aunt a penny

綿畑の仕事をやめても金銭的に困らないのは叔母の存在があるからである。「また50ドル頼んだ」とあるように何度も叔母に金を頼んでいるサルであり、いい奴だからどんちゃん騒ぎをもう一度やろうとポンゾーに約束出来るのは、いざとなれば頼れる叔母がいるからである。所属と安定が常にサルにはある。

破天荒な生活をディーンたちと続けてきたサルは、ローラというフィアンセを得る。そして作品の結末で、付き合う友人たちとメトロポリタン・オペラ劇場へ向かおうとしているサルが描かれているが、芸術の鑑賞、オペラ劇場でのデューク・エリントンのコンサートというのは一般的にある程度の余裕がある人たちが楽しむもの、という印象がある。サルは成功を取めた人物として結末で描かれている。

冬の寒い晩にキャデラックに乗ってコンサートへ出かけるサルと、一緒にいたいとするディーンを拒むサルの友人たち、そしてサル自身も友人たちの意見に従う様子は、サルとディーンの立場と身分の対比を表すものであり、成功者サルと寒い冬の晩に徒歩で移動しなければならないディーンという、必ずしも明るい未来を感じさせない人物の対比である³。旅の途中でも作品の結末でもサルには安定が用意されている。

ケルアックの作品を説明した Jason Spangler は “ His works are products of a philosophical imagining of America that include the anxiety born of a youth spent in the throes of socioeconomic decline ” (310-11) としているが、この評は『路上』におけるサルの結末についてはあてはまらない。経済的不況とは反対に成功したサルが描かれている。作家としての成功もサルには感じられるし、つきあう友人からも推測されるように、世間という開かれた社会での自己発見を旅の後に実現し、安定と余裕を手に入れたのである。常にサルには安定と所属があったし、やはり結末でも成功した人物と

して安定が感じられる。安定に向かっていったサルだし、実際に安定を手に入れた人物。これがサルを説明する言葉である⁴。

2. ディーンの不安定

初期のディーンを表す言葉、それは“ 'cause now is the time and we all know time! ”(103)。これで全てが説明できる。圧倒的なエネルギーの持ち主でサルを導き、そして時には裏切り、常識的には考えられない破天荒な行動を続けていく。ドラッグ、セックス、酒の乱痴気騒ぎ。ディーンの様子は上の引用に示した通り動きそのものであり、安定とは正反対の刹那性に満ちている。以下における引用は、ディーンを説明する代表的な描写である。

‘ Now Sal, now Marylou. I want both of you to do as I’m doing, disburden yourselves of all that clothes—now what’s the sense of clothes? now that’s what I’m sayin—and sun your pretty bellies with me. Come on!’ We were driving west into the sun; it fell in through the windshield. ‘ Open your belly as we drive into it. Marylou complied; unfundydudied, so did I. We sat in the front seat, all three. . . . (146)

着ているものを脱ぐというのは常識からはずれた行為であり、世間には認められない行動である。動く車の中でのこの非常識は、止まったら服を着ていないゆえに、社会から断罪されるという動き続けなければならない宿命を表すと同時に、車の中での行動という閉ざされた領域において認められたものを表す。ディーンたちの状態は、世間とは隔絶された閉ざされた空間にある。

しかし、いつか車が止まらなければならないように、このディーンの状態はずっとは続かない。彼は動きを止める。ガラテア (Galatea) という友人に“ For years now you haven’t had any sense

of responsibility for anyone ”(176)と咎められたディーンはくすくすと笑い始める。そしてその場の真剣さとは似つかわしくないちょっと踊ってみせるという行動をとる。周囲からは見下げられた憎悪の目を受けるディーンである(176)。断罪の中心であり、動きを失い力を失った様子を示している。彼を慕っていたサルの日からも“ the Idiot, the Imbecile, the Saint of the lot ”(176)というように映り、初期のサルの評価、“ Dean’s intelligence was every bit as formal and shining and complete ”(9)というものからは正反対となった。動きがあったディーンは周囲からの軽蔑を受けて決まりの悪さを紛らわすために踊るという幼稚さを示している。知性とは反対であり、サルの判断を抜きにしても愚かさを表すものとなっている。

ビート世代のバイブルと言われる『路上』であるが、ビート世代の限界を示した Catharine R. Stimpson は“ Despite their rejection of controls, the Beats could not purge all limits and limitations, even in themselves. They both repeated some cultural patterns and imposed the past on others ”(375)と説明し、制限を拒絶しながらもそれを無視し続ける事は出来ないビート世代、歴史の中での一時的現象であり、今までの歴史のパターンを繰り返してそれを後世に伝えているだけである、というビート世代の特異性を否定しているが、ディーンのエネルギのある動きと彼のサルから得ていた敬意という特別性は、一時的なものであり、力を失うのは当然である、という事にも関連付けられるのではないだろうか。ディーンは力を失う。

動き続けようとするが、動き続けることは出来ないディーンであるが、もう一つディーンには目指しているが、実現できない事がある。それは家族という理想の実現である。ディーンには肉親に会いたいという願望が間違いなくある。それが分かる場面を引用してみたいと思う。サルとディーンの話の場面である。

‘ So, ’ said Dean, ‘ I’m cutting along in my life as it leads

me. You know I recently wrote my old man in jail in Seattle — I got the first letter in years from him the other day ’

‘ Did you? ’

‘ Yass, yass. He said he wants to see the “ babby ” spelt with two b’s when he can get to Frisco. I found a thirteen— a— month coldwater pad on East Fortieth; if I can send him the money he’ll come and live in New York— if he gets here. I never told you much about my sister but you know I have a sweet little kid sister; I’d like to get her to come and live with me too.’

‘ Where is she? ’

‘ Well, that’s just it, I don’t know— he’s going to try to find her, the old man, but you know what he’ll really do ’ (229)

仲間と一緒に旅を続けるディーンであるが、上の引用でも分かるように父親にも妹にも会いたいディーンである。しかし作品の最後で“ Old Dean Moriarty the father we never found ”(281)とあるように、この理想は決して実現しない。

そもそもディーンの奔放なる性は家族の理想とはかけ離れたものである。“ Camille gave birth to Dean’s second baby, the result of a few nights’ rapport early in the year. And another matter of months and Inez had a baby. With one illegitimate child in the West somewhere, Dean then had four little ones and not a cent ”(224-5)という説明があるが、妻でない女性に子供を産ませ、私生児を持ち、金がなく仕事もない状態で4人の子供をもうけるとは、家族の理想とは反対の家族離散を想像できる状態ではないだろうか。ディーン的生活はカミールという妻に落ち着く事になるという説明が、作品終盤にあるが(279)、他の女性や私生児の存在は一体どうなるのだろうか。家族の理想の実現は極めて難しいディーン立場である。

家族を求めつつ、それを否定するようなディーンの行動は、家族の愛を得たいと願う子供の感情であり、そして破滅的な性の奔放さは、同様に子供じみた行動でもある。大人でありながらも、子供を感じさせるディーンであり、大人になり切れない子供である。J. T. Barbarese はディーンについて “ a fabulous reminder of how warped the American male identity can become when it fails to grow up ” (592) と説明しているが、父探しの子というアメリカ文学の典型に当てはまるディーンの子供時代⁵、大人になる事を否定しているディーンの様子を説明している言葉として考えられる。

動き続ける事を目指すが、それが実現できないディーン、家族の理想はあるが、それが実現できないディーン。サルが人とのつながりの中で成功と自己発見を実現できたのに対して、ディーンは辛い状況を感じさせる終わり方である。サルが安定の終わり方だとしたら、ディーンの子の人生は続かなければならないし、安定からはほど遠い、エネルギーを持った動きの実現も家族の理想の実現も出来なくなった今でも、精神的に負けながらも車の旅を余儀なくされた、実験の続いた人生である、と言えるのではないだろうか。

結論

本稿の問はサルとディーンの子の別れの意味を探ってみる事であった。これまでの説明で分かったようにサルには安定があるし、人とのつながりの中で自己発見を実現した確実性がある。またディーンは動き続ける事は不可能だし、家族の理想の実現も出来ないし、実験性の人生を続けていかなければならない不安定さが特徴的である。安定と不安定の差がある。ここで作品の終盤の場面を引用してみたいと思う。

So in America when the sun goes down and I sit on the old broken-down river pier watching the long, long skies over New

Jersey and sense all that raw land that rolls in one unbelievable huge bulge over to the West Coast, and all that road going, all the people dreaming in the immensity of it, and in Iowa I know by now the children must be crying in the land where they let the children cry, and tonight the stars'll be out, and don't you know that God is Pooh Bear? the evening star must be drooping and shedding her sparkler dims on the prairie, which is just before the coming of complete night that blesses the earth, darkens all rivers, cups the peaks and folds the final shore in, and nobody, nobody knows what's going to happen to anybody besides the forlorn rags of growing old, . . . (281)

太陽が沈む様子、闇が包み星が出ている様子、みすぼらしく年をとる現実の描写など衰えに関連した記述が特徴的である。時間の経過が現実的であるように、『路上』の時代のビート世代、続くヒッピーの世代と時代が移り、ベトナム戦争の終結や若者人口の減少などで、激しさの時代から、大学卒業証書などの現実的な安定志向の時代へと変わっていく⁶。1950年代、1960年代の公民権運動やビート世代、ヒッピーの戦闘性は時代と共に失われていく。

『路上』が自伝的である事はよく知られているし、“*On the Road is patently autobiographical in content. . . . Nothing that happens has any dramatic reason for happening*”(305)と Adam Gussow も語っている。人の衰えは当然だし、劇的要素とは関係のない自伝的要素に含まれる人の衰えと、そして時代の変化、あるいは激しさから平静へと変化する時代の衰えは無関係ではない。

サルとディーンが行動を共にしたのは何年間かの一期間であり、短い期間の事である。先に引用した衰えの事実に対して二人の状況はどうであろう。安定を手に入れたサル、不安定を生きなければならないディーン。時代の変化に対して、対応できているのはサルだ

けであり、ディーンは社会が安定へと向かっていく時でさえも、人生の基盤となる安定性は持っていない。時代のみならず、若い時代だから許されるという事も、年をとれば世間から拒絶され、不幸の原因にもなる。人生の経過、激しい時代から安定した時代への変化という二つの点で、サルとディーンの間隔は異なっていく。時間を共にしたのは一時の事である。サルとディーンの違い、安定と不安定の差異は、人生の経過と時代の変化、両方において差が大きくなっていくものであり、これが二人が別れる原因である。これが本稿で出した結論である。

『路上』はビート世代のバイブルと言われており、ビート世代は今となってはアメリカ文化の一時的現象と懐古的に思われるが、その時代にどっぷり浸かって、時代を見抜く目を持っていなかった人が、どれだけ人生の後半で辛い現実には耐えなければならなかったのだろうか。若い時の放出は必要だが、充電も必要であると考えさせる作品ではないか。

註

1. 以下、『路上』からの引用は Jack Kerouac、*On The Road*(2000)、Penguin Books の版による。
2. 実際ジャズは即興性と関連付けられる事が多いが、決まった演奏を決まった時間で行うスウィングやコントロールされたクールなど、即興性とは反対の理知的でコントロールされたものも多い。理性と即興性が時代と共に変化していき、黒人音楽と西洋音楽の融合がジャズである。
3. サリンジャーの短編「倒錯の森」で大学教授が久しぶりにあった幼馴染みの女性を、意図的に飲食店を探すふりをして冬に徒歩で歩かせるという描写がある。今は墮落してしまったその女性の徒歩での移動の様子が、このディーンズの冬の徒歩での移動と重なる。精神的な死としての冬が印象的である。
4. 車での移動は列車とは違い自由な道を選択できる。この事を Jason Vredenburg はサルを説明する言葉として“ it enables the traveler to improvise along various roads and routes, as Sal Paradise eventually decides to do ”(181)としている。
5. ヘミングウェイの『老人と海』やフォークナーの短編「熊」など父親的な人物と少年というモチーフがアメリカ文学に度々出現するが、ヨーロッパの子としてのアメリカという歴史観に関連している。
6. 他にも黒人選挙登録数の増大、医療制度の改善、貧困対策の充実など1970年代になり実施された。変動相場制への移行などにより、アメリカ経済の国際競争力の低下なども、ビート世代、ヒッピーの世代の文化の終焉に無関係ではない。

引用 · 参考文献

- Barbarse, J. T. . “ Fifty Years of Jack Kerouac's "On the Road". ” *The Sewanee Review* , Fall, 2004, Vol. 112, No. 4 (Fall, 2004), <https://www.jstor.org/stable/27549602>, pp. 591-4.
- Cresswell, Tim. . “ Mobility as Resistance: A Geographical Reading of Kerouac's 'On the Road'. ” *Transactions of the Institute of British Geographers* , 1993, Vol. 18, No. 2 (1993), <https://www.jstor.org/stable/622366>, pp. 249-62.
- Gill, R. B. . “ Kerouac and the Comic Dilemma. ” *Studies in Popular Culture* , April 2005, Vol. 27, No. 3 (April 2005), <https://www.jstor.org/stable/23414999>, pp. 87-98.
- Gussow, Adam. “ Bohemia Revisited: Malcolm Cowley, Jack Kerouac, and "On the Road. ” *The Georgia Review* , Summer 1984, Vol. 38, No. 2 (Summer 1984), <https://www.jstor.org/stable/41398672>, pp. 291-311.
- Johnson, Ronna C. . “ "You're Putting Me on": Jack Kerouac and the Postmodern Emergence. ” *College Literature* , Winter, 2000, Vol. 27, No. 1, Teaching Beat Literature (Winter, 2000), <https://www.jstor.org/stable/25112494>, pp. 22-38.
- Johnston, P. J. . “ Dharma Bums: The Beat Generation and the Making of Countercultural Pilgrimage. ” *Buddhist-Christian Studies*, Vol. 33 (2013), <https://www.jstor.org/stable/43185117>, pp. 165-79.
- Kerouac, Jack. *On the Road*, Penguin Books, 2000.
- Malcolm, Douglas. “ "Jazz America": Jazz and African American Culture in Jack Kerouac's "On the Road". ” *Contemporary Literature* , Spring, 1999, Vol. 40, No. 1 (Spring, 1999), <https://www.jstor.org/stable/1208820>, pp. 85-110.

- Mortenson, Erik R. . " Beating Time: Configurations of Temporality in Jack Kerouac's "On the Road". " *College Literature* , Fall, 2001, Vol. 28, No. 3 (Fall, 2001), <https://www.jstor.org/stable/25112602>, pp. 51-67.
- Spangler, Jason. " WE'RE ON A ROAD TO NOWHERE: STEINBECK, KEROUAC, AND THE LEGACY OF THE GREAT DEPRESSION. " : *Studies in the Novel* , fall 2008, Vol. 40, No. 3 (fall 2008), <https://www.jstor.org/stable/29533876>, pp. 308-27.
- Stimpson, Catharine R. . " The Beat Generation And The Trials Of Homosexual Liberation. " *Salmagundi* , FALL 1982-WINTER 1983, No. 58/59 (FALL 1982-WINTER 1983), <https://www.jstor.org/stable/40547579>, pp. 373-92.
- Vredenburg, Jason. " "Solitary Bartlebies". " : *Twentieth Century Literature* , June 2016, Vol. 62, No. 2 (June 2016), <https://www.jstor.org/stable/10.2307/26806741>, pp. 170-96.